

第 1 回屋久島世界遺産地域科学委員会の主な意見

○世界遺産地域の管理の方針

- ・屋久島全体という広域的な視点をもって、遺産地域を保全するという考え方が必要
- ・科学委員会で、遺産地域の管理方針を議論することが重要

▶ボトムアップによる管理

- ・遺産地域の管理に当たっては、屋久島の人達と、課題や管理の考え方などの情報の共有が非常に重要
- ・地域との情報の共有のためには、地域の意見や提案を聴く機会が重要
- ・世界遺産の管理の考え方の整理を進めていく上では、直接的な住民参加の外、間接的な方法としては、地域住民による各種活動のネットワークも取り込んで、地域の意見や提案を幅広く聴く仕掛け作りが必要
- ・知床においては、地域コミュニティや関係者の参画を通じたボトムアップアプローチによる管理方法が、IUCNより賞賛された
- ・遺産地域を効果的、効率的に管理するためには、モニタリング項目及び指標の外、モニタリングの実施において必要となる予算・経費の把握、管理機関以外の地元関係者や研究者、研究機関などを含むモニタリング実施担当の検討や情報の共有化も必要

▶科学的な知見に基づく管理

- ・屋久島全域で行われているモニタリング、調査研究地点やその内容などを効率的、効果的に共有し、科学的に分析を行うためには、GISを使った管理が重要

▶広域的な視点をもった管理

- ・屋久島は世界遺産と生物圏保存地域の二重登録地で、MAB計画（ユネスコ（人間と生物圏）計画）の考えの中では、コア・エリアを守っていくために、人々が自然を利用して営みを行う区域としての緩衝地帯というものが位置付けられており、遺産地域の管理の視点としては、緩衝地点を含めた管理施策やモニタリングの実行など、トータルな管理方策を作っていくということが重要
- ・遺産地域の生態系と共通性や連続性を有する遺産地域の隣接地では、森林の利用が行われてきた区域があり、管理の視点としては、照葉樹林文化の一つの見本という位置付けも可能

○世界遺産としての屋久島と、屋久島全体の保全の考え方

- ・屋久島の方々が、屋久島の文化的な価値を含めて、自分達で島の価値を認識して島全体を今後どうやってより良い形で次世代に引き継いでいくかという屋久島での主体的な議論と、世界遺産という国際的な枠組みの中で、どうやって世界的な要請に答えていくか、二つに分けて議論すべきである
- ・IUCNの評価書というものがあって、いろんなコメントも付いているため、国際的な、人類全体の責任として答えていこうという発想で取り組む方が良い
- ・IUCNのクライテリア+αの価値を、我々として見出して、それも加えた評価をしていけば、何の問題もないが、IUCNが評価している部分を重視せず、他の所を重視して提案しても通用しない
- ・IUCNにこれを認めろ、あれも認めろと言うよりは、できちんと遺産として認められているわけであるから、これをまず基本にして、それからどこまでこういう文化といった考え方を広めながら、住んでいる人にとっても良いし、自然環境にとっても良い、という形に持っていくのが良い
- ・カテゴリーを変えてまでということとは、今回は現実的ではなく、クライテリアと別にしっかり認識をして、保全に生かしていくということに、常に対応していくというのが必要

○世界遺産の価値について

- ・IUCNのクライテリアで認められた国際的な屋久島の価値について、きちんと答えていく専門家集団としての委員会が、屋久島の科学技術的な見方にどういう考えを持って臨むのかということが問われている

➤ 自然景観

- ・屋久島の場合、スギの原生林が、森林の景観として、例えば、カリフォルニアのセコイアデンドロンの林とかに匹敵するような価値が世界的にあるというような評価を受けている
- ・IUCNの評価というのが広報的な情報としては採用されてしかるべきで、縄文杉がただ一本だけあるというのではなく、他にも千年を超えるようなスギがたくさんあるという原生林の景観全体が評価されている
- ・千尋の滝を含む屋久島の自然美というものが、世界遺産の価値に相当するものだという認識で対応していく必要がある
- ・水は屋久島の自然を特徴付ける一つの大きな要因であり、水系分布を価値として入れることが絶対に必要

▶生態系

- ・温帯域の島で、2000mの垂直の勾配があって、そこに亜熱帯林から温帯までの植生分布が見られるという、その学術的な価値に高い評価が置かれている
- ・暖温帯も含めて、温帯域に2000m級の島というのは屋久島だけである
- ・生態系に関しては、海岸から頂上までの連続性という点では西部で確保しているが、西部と東部では雨量も全然違い、植生も違うことから、南部や東部の植生の連続性の確保が必要
- ・世界遺産のコア地域が非常に狭く、また垂直構造が足りない部分があるということを考えれば、やはりその周りにある植生と現在指定された部分の関係が大切
- ・今まで森林施業が行われてきた地域をどう考えるかといった視点が欠落
- ・これらの課題は、モニタリング計画とも絡む問題
- ・海岸線の常緑樹林を含めた形の、照葉樹林全体としての再度の見直しというか、その辺の評価が必要
- ・屋久島の価値の維持には島民が非常に関わっており、過去の人と自然の関わり（森林利用）等、幅広く入れることが必要

▶生物多様性

- ・日本の絶滅危惧種のホットスポットは、小笠原と屋久島と沖縄であり、この3ヶ所を守れば、半分ぐらいは保全できる
- ・平成24年の再評価にあたっては、生物多様性についてもきちんと資料を出して、国際的な評価を受けることが必要

○モニタリングの基本方針

- ・管理計画案の前段に、基本的に科学委員会として、屋久島全域を考えた時に、特に世界遺産の評価を考えた時に、どういういったモニタリングが重要かという基本方針がまず必要
- ・屋久島原生自然環境保全地域の調査のような誘導的な、目的意識をもう少し鮮明に設定して、それに向かって動いていくような、大きな研究プロジェクトやレビューといったものが必要
- ・より先端的、モデル的なモニタリングというものをやってみることが必要
- ・腐朽菌、共生菌、どのような菌と共生しているのか長期的な研究データの蓄積が必要